平成 26 年度　山王遺跡 (八幡地区)
発掘調査現地説明会資料

宮城県教育庁文化財保護課　　平成 26 年 6 月 21 日　午前 10 時 30 分～

調査要項

遺跡名	山王遺跡 (さんのういせき)
所在地	多賀城市南宮字八幡
起因事業	三陸沿岸道路仙塩道路 4 車線化建設工事・(仮称) 多賀城ＩＣ建設工事
調査主体	宮城県教育委員会 (教育長　髙橋仁)
調査担当	宮城県教育庁文化財保護課
調査員	齋藤和機　遠藤則靖　高橋透 (多賀城跡調査研究所協力) 西口正純 (埼玉県派遣)　岡本泰典 (岡山県派遣)　井上主税 (奈良県派遣)
調査期間	平成 26 年 4 月 7 日～ 6 月 30 日 (予定)
調査面積	約 1200 ㎡（本調査対象範囲約 410 ㎡）
調査協力	国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所

はじめに

山王遺跡の発掘調査は、三陸沿岸道路仙塩道路の 4 車線化と、多賀城インターチェンジ (仮称) の建設工事に先立ち、平成 24 年 3 月 26 日から宮城県教育委員会が実施しています。

三陸沿岸道路は、東日本大震災後の東北地方の復興に重要な役割を期待され、「復興道路」として早期完成が望まれています。このため当教育委員会では埋蔵文化財の発掘調査基準を弾力的に運用し、さらに他県より自治体職員の応援を得ながら、早期の調査終了をめざしています。

山王遺跡の概要

山王遺跡は、これまでの調査から、古墳時代前期には水田が広がること、古墳時代から奈良時代には微高地に集落が広がること、平安時代には碁盤目状に道路がつくられ、都市があったこと、鎌倉・室町時代には屋敷が点在していたことが明らかになっています。

特に奈良・平安時代には、遺跡北東部に陸奥国府多賀城が置かれ、政庁の中軸線に乗る南北大路と、外郭南辺に平行する東西大路を基準に、約 100m 四方の碁盤目状の街並みが段階的に整備されていきました。（図 1 参照）

こうした街並みは多賀城のほかに、当時は平安京・平城京や大宰府など、ごく限られた場所にしかありませんでした。この多賀城の街並みの発掘調査が、古代国家、古代東北を解明するために、非常に多くの情報を提供してくれます。

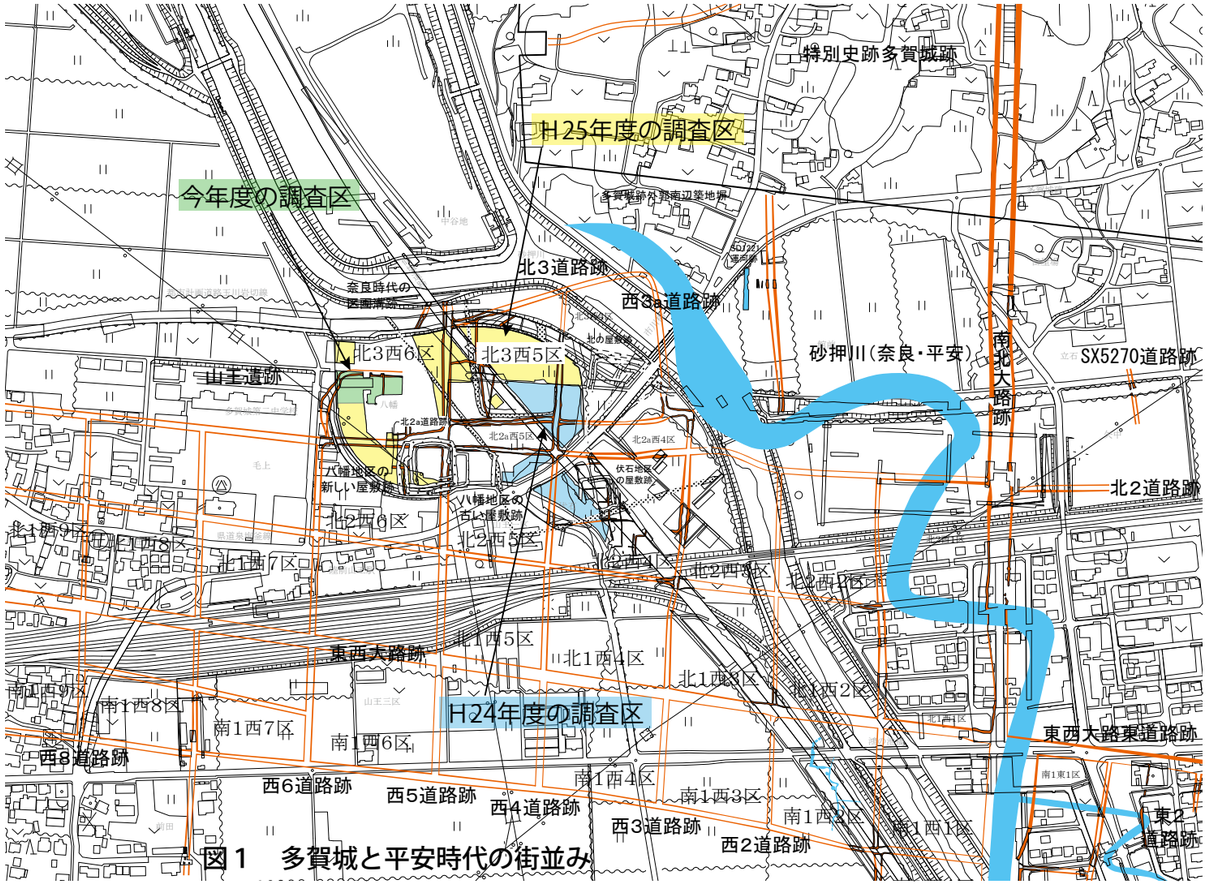


図１　多賀城と平安時代の街並み

見つかった遺構と遺物 (奈良・平安時代)

今年度の調査では、北３道路や、宅地内を区切る南北区画溝と、宅地内からは竪穴住居や掘立柱建物、井戸・土坑といった、生活に関わる施設が発見されました。そして、土師器や須恵器、砥石などの生活に関わる道具も出土しています。また畑の跡など生産に関わる痕跡も見られます。

北３道路は南にある北２道路から約７０ｍ離れた位置になり、東西約１００ｍ・南北約７０ｍの宅地になります。南北区画溝は宅地のほぼ中央を東西に区切っています。

南北区画溝を境に掘立柱建物や竪穴住居が集中する東地区と、畑の跡が多い西地区に大まかに分かれており、区画された街の中の使われ方も分かりました。

また過去の調査より、道路から北側には湿地が広がることが分かっています。こうした地形的な制約から、この地区が街並みの北のはずれであり、北に約７０ｍまでしか宅地を広げられなかったと考えられます。

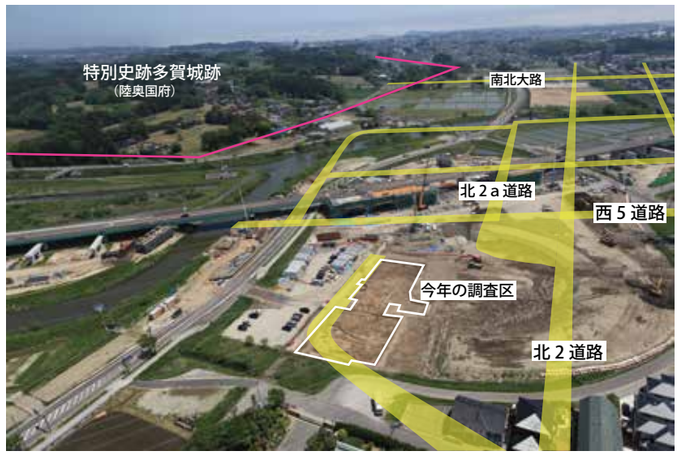


図２　多賀城政庁と調査区の位置（航空写真）

本調査区の奈良・平安期遺構面（Ⅲ層）完掘写真（北東から）

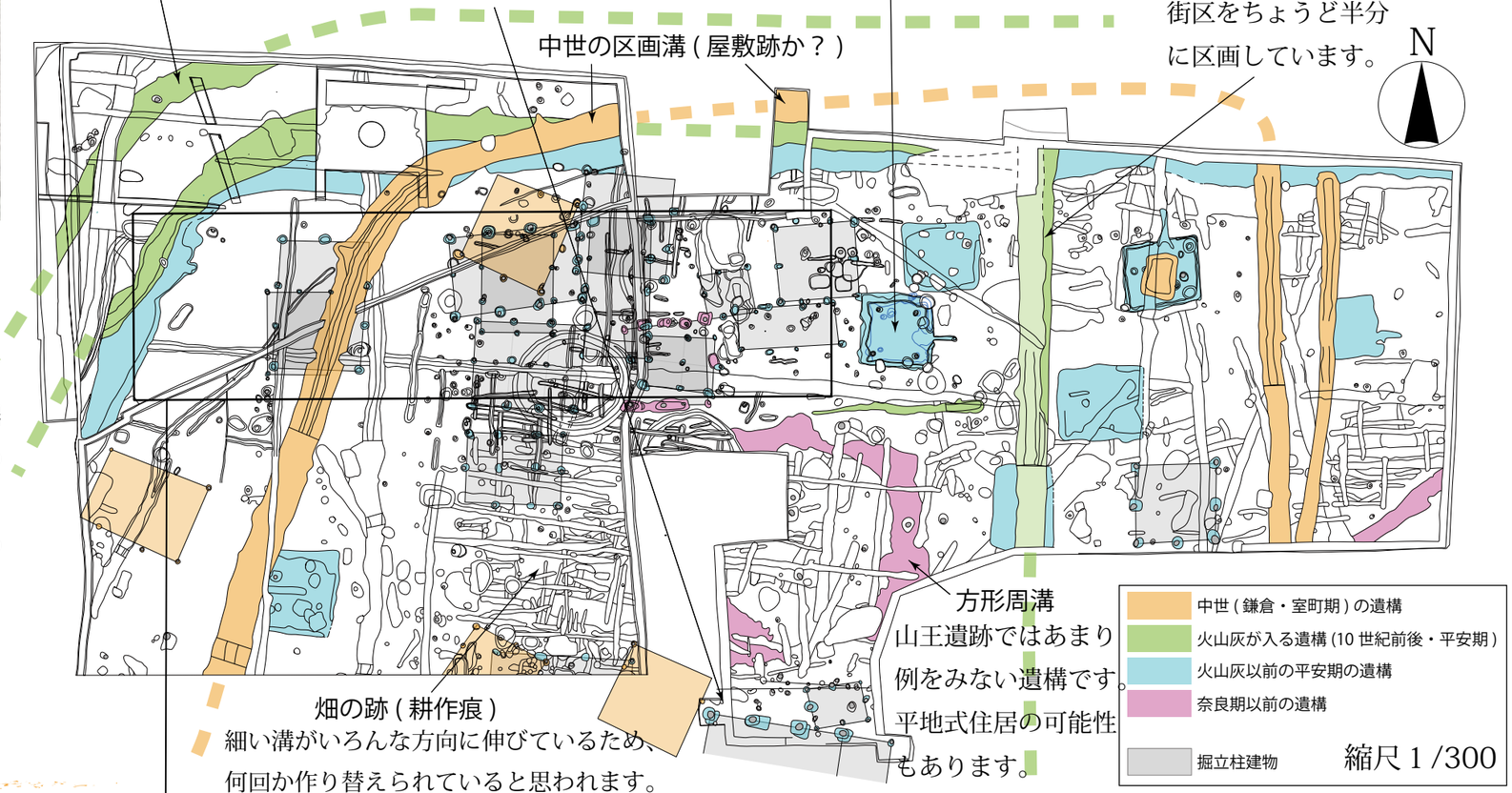
道路跡

二つの側溝にはさまれた中が道路の路面になります。道路には火山灰が堆積し、途中から東の方向へ曲がっています。

ひさしを持つ掘立柱建物跡（東から）

竪穴住居跡（西から）

南北区画溝（北から）



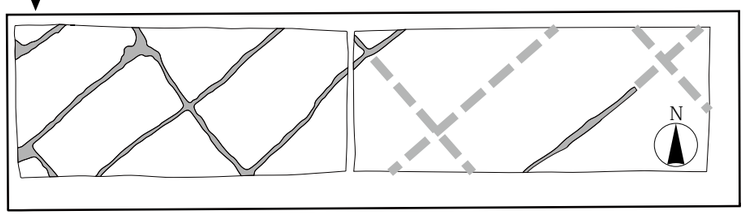
出土した奈良・平安期の遺物

灰色の遺物は須恵器（すえき）で、肌色・黒色のものが土師器（はじき）といいます。いずれも、主に当時の生活に使われていたと思われます。

見つかった遺構（古墳時代前期）

奈良・平安期の遺構がある地層面の、およそ 1m 下からは、古墳時代前期のものと考えられる水田の跡が見つかりました。

水田は約 3.3m × 8.2m ほどの広さで、長方形をしています。あぜは黒色の耕作土でつくられています。耕作面が西から東へ徐々に下がっているため、西から東に水を流していたと考えられます。



本調査区　古墳時代前期の水田

古墳時代前期の水田跡（南東から）

まとめ

今回の調査では、平安時代に整備された街並みの、宅地と外との北の境界がわかりました。そして区画された宅地内が、南北区画溝を境に東西で使われ方が違うこともわかりました。またその下の地層面から、古墳時代前期と考えられる水田が見つかりました。今後、出土した遺構と遺物の検討を重ねて、より詳細に各遺構の年代や性格を解明していきます。